

キリスト道講演会

小池辰雄 その人物と業績——小国町愛蔵書センター設立一周年記念講演

2004年9月26日(新潟県刈羽郡小国町 商工物産館)

奥田 昌道

小池先生との決定的な出会い 根っこの世界が大事だよ 誰もが自己にとらわれている 南無キリスト 鐘は上からぶら下げられている 鳥を見れば鳥となる 蔵書は先生の分身です 精神一到何事か成らざらん 兄貴の分も戦わなければ 内村鑑三の大集会に出席 キリストは無者 人間が空っぽになる どん底に立たれるキリスト みこころをなさってください 敬天愛人 天賦天職 光の世界へ 自律自彊 専門はゲーテ 太陽はキリストの愛の血 在りて在らしめる者 『無の神学』 『霊界の星々』 そっくりそのまま受け入れる 自由人(会場からの質問)

●小池先生との決定的な出会い

どうも、皆さん、よくおいでくださいました。小国町^{おぐに}愛蔵書センターの関係の方々の暖かいおもてなしをいただきまして、このように素晴らしい所で、私の恩師であります小池辰雄先生のことを語る機会を与えていただきまして、大変感激しております。

皆さまは、小国町の方は既に御存知かどうかわかりませんが、さきほど、武蔵野市の図書交流委員会の副委員長という立場でお話くださった小池信雄さんは小池辰雄先生のご長男です。今、私を紹介してくださった小池牧子さんはその奥様でいらつしやいます。そういうプライベートな立場を一切仰らなかつたので、そこで私はちよつとその部分を補いたいと思ひまして、申し上げている次第です。

小池牧子さんの紹介にはもう参りました。そういう先生のご期待に果たして私が添っているかどうか。「先生の著作集の全文を暗記するほどに読んでいる」と仰られて、少し困ります。いや、むしろかしいところがありますから。特に『無の神学』という神学の本の中で、日本の人たちとの比較とか、中国の人たちとの比較なんか出てくるんですね、キリストとの比較で。老子をとりあげて——老子は「無、無道」ということを言った方ですから——その老子の無とキリストにおける無というのを書いておられるところは、私は漢文があまりできないものですから、少し敬して遠ざけてまいりました。だから、これから家に帰りましたら、もう一度勉強をやり直さなければなりません。

ご紹介いただきましたように、私と小池辰雄先生との出会いというのは1959年でした。その時の年齢ということまで考えなかつたけれども、今のご紹介を聞いて、先生が55歳、私が27歳。ちょうど半分です。ちょうど半分のところで出会ったというのも非常に不思議な気がします。つまり、先生からいえば、私は息子のようなものですね。28年という年齢差があります。それが私にとつては決定的な出会いでありました。その出会いがなければ、また私の歩んだ人生も変わっていたかもしれないというような出会いでありました。

と申しますのは、私は1956年に、人生の悩みから必死に救いを求めて、ちょうど大学の友人というか、同じ研究を志していた者が非常に熱心なクリスチャンであつたので、その人から初めてキリストの話聞いた。私はその頃は悩んで、藁にもすがる思いで、「キリストを信

じます」と言つて、キリストにすがった。そして、一つの道が開けたんです。

その時に通いました教会が北欧系の宣教師の教会だった。私にしたら、救われたのはありがたいけれども、息がつまりそうでした。北欧の方々は善意なる方々ですが、日本に対する理解が乏しい。日本の仏教とか、神道とか、日本の宗教、文化に対してほとんど理解がない。

「キリスト教でなければだめです。キリスト教以外のものに目を向けるのは不信仰です。そんなものではだめです」

という、凝り固まったオーソドックスな信仰です。ファンダメンタリズム(原理主義、教条主義、根本主義)というんですけれども、そういうキリスト教を信奉しているところでしたので、私は窒息しそうだった。その時に、小池先生という方に出会った。

先生はドイツ文学者で、東京大学教養学部のドイツ語の先生ですけれども、単なるドイツ語の先生でなくて、非常にキリスト教の方に対する理解が、造詣が深い。ドイツ語も、聖書とかルターの書物とか、そういったものを通してドイツ語を教える。教室がまるでキリスト教のお話をしているような、そういう方だった。

その方が、1959年の11月初旬にドイツ文学会が京都大学で開かれたときに、ドイツ文学会においてになって、その機会に——私は京都大学で「聖書を読む会」をやっていました、聖書研究会と言っていましたけれども——会の主催で先生をお招きして大学の会館で講演会を開いた。一般の方とか学生が150人くらい集まりました。私はその司会をさせていただいた。その時の先生のお話があまりにも素晴らしくて、私は正直そこで目が開かれた。「これが本ものだ」と思った。それ以来、その道をまっしぐらに來ました。

「決定的な出会い」とは、そういうことでした。私は学者のはしくれで、しかも、法律学、民法という勉強に志して、1955年に大学を卒業し、その頃は助教授という身分でした。法律学というのはこの世の俗世間のことを対象にしている学問です。本当にドロドロとした人間の、ある意味では、どうしようもない救いがたい人間を相手にしながら、いかにすれば、世の中が円満におさまるかということを考えているわけです。刑法は、処罰というものがありますから、違います。民法というのは、人と人との関係です。そういう人と人との関係で、財産の問題とか、離婚の問題、親子の問題、そういった問題を扱うわけですが、そこでの人間を対象とした学問です。その中に法則をもちこんでくる。そこからまた法が生まれるという、そういう世界です。要するに、俗世界、俗界なんです。

キリスト教の世界は神さまの世界ですから、聖なる世界でしょ。我々の本来なら踏み入ってはいけないような神聖なる世界なんです。宣教師とか、神父さんとか、牧師さんとかいう方は、そういう神聖なる世界に仕える立場だから、己も神聖でなければいけないし、人にも神聖なことを説く。そうしますと、非常なギャップがある。そして、我々俗人の心というのがなかなかわかっていただけないと、ひがんでおりました。

だから、「すべし、すべからず」なんです。私の接した宣教師さんは、非常に聖潔と申しますか、女性の宣教師もいらつしやたけれども、その方なんかも15歳でその道に入つて、俗世間とは関わりがなくて、

「映画もダンスも何も、そんなものは私には必要がありません」

なんて言つて、涼しい顔をしているような人ですから、住んでいる世界がちがうと思った。男性の宣教師にしても、「こういうのはどうですか、ああいうのはどうですか」と聞くと、

「それはだめです、それもだめです」
と。「だめです」という答しか返ってこないんです。

たとえば、お葬式があると、誰でもがお焼香をなさいます。写真を前にして手を合わせて拝む。
「それはいけない。偶像を拜んではならないと書いてあるから」
「写真ではないですか？」

「いや。そういうものを拜んでいると、ノンクリスチャンの方が、それを見ている時に偶像を拜んでいると誤解するから、それはいけない。家庭の中のお仏壇はつぶしなさい。そんなものは実体のないものです。キリストの神だけが神だから、およそ形あるものは全部否定しなさい」

と。そういう調子ですから家庭生活も何も成り立たないでしょ。その時に小池先生に出会った。

●根っここの世界が大事だよ

先生は実に自由自在でした。その話を諄々^{じゅん}とお話したい。こんな方がいらつしやるのか。しかも、学問の道と信仰の道をみごとに両立させて一つに溶け込んでいる。これは素晴らしい。それから、私は思った。先生はキリスト教とか聖書を学問的に専門にやっておられる。ドイツ語とはいいながら、やっている材料はそういったものばかり。だから、信仰という世界と学問の世界が一致しやすい。それに引き換え、我が身はまだだ。それで、先生に、

「いや、悩んでいるんですよ。私はどうしたらいいですか」

とご相談した。キリスト教でないときには、学者の道を我が道と思ってきたわけです。ところが、キリスト教になったら、今までのものは全部、いったん否定しないといけません。白紙にもどらないといけない。白紙にもどったときに、一体私は学問を続けていつていいのかどうか、これからどうしたらいいのか。

「本当にキリストに熱中するなら、職業を捨てて、神学校へ入りなさい」

と、宣教師からはこういう答しか返ってこない。みんなが伝道者になれと言う。さあ、困ったなど。御声も聞いてない人間が、そんな勝手なことをしていいのだろうかと思っておりました。それで、小池先生にご相談した。そしたら、「奥田君、心配はいらないよ」と言ってくれました。講演の中でも仰つてくださったけれども、樹木の絵をお書きになった。

「樹木を見てごらん。根っこがあるだろう。人は地上に見えているところばかり見えている。見えている世界は、太い幹があり、太い枝があり、細い枝があり、葉があり、花が咲く。そういう見えている世界は文化文明の世界である。しかし、この文化文明というものが本当に健やかに——つまり、別の言葉でいうと、社会を幸せにする、人を幸せにする——そういう本当に健全な社会を形作るような文化文明であるためには、根っここというのが大事なんだ。根っここというのは見えないだろう」

と。木を見たとき、「ああ、立派な木だな。三百年、五百年、千年もたっている。凄いなあ」と言つて、みな驚きますね。ところが、根っこがどういう姿であるか。おそらく、枝を大きく張っている木は根っこも大きく張っているはずですよ。そうでないともたない。だから、

「根っここの世界が大事なんだ。これが正に、神さまと交わる世界、仏さまと交わる世界。そういう見えない世界、魂の世界だ。」

人間はみんな、魂をもった存在だ。単なる肉体的な物質的な存在ではない。魂をも

った存在は、魂の根源であるお方と交わり、そこから栄養分を吸い上げていないと、人間としても枯れてしまう。文化文明というものが人間の営みである以上は、やはり、営む人自身が深く、地中深く根をおろして、そこから本当の養分を吸い上げて、そして、健やかな健全な素晴らしい枝ぶりになり、そして花が咲く。

宗教の世界は根つこの世界だ。学問の世界は見えている世界で、伸びていく方向は反対だ。宗教の世界は地中深く下りていく。学問の世界、文化の世界は上へ上へと伸びていく。方向は反対だけれども、両方は相反しない。根つこが地上を支えている。だから、君の学問は、今は両立しないかもしれない。この世のことに与かっている学問と、神さまのことに熱中する信仰の世界は、今は相矛盾しているように、二足のわらじのように思うかもしれないけれども、必ずそれは調和する時がくるから、その時を望んで、今は疑わないでやりたまえ」

と言っていたいたんです。これは、私はありがたかったですね。

●誰もが自由にやられていい

その頃の私のおりました昭和30年代から40年代にかけての学問の世界は、特に京都大学なんてのは非常に左翼の思想が強いところです。学者も、

「社会科学をやる学者はマルクス主義でなければ科学的でない。学問が科学的であるためには、唯物史観、マルクス史観に立たなければならぬ」

と、それを信奉している方々がほとんどなんです。

「法律なんていうのは権力者が人民を統制するために抑圧する手段であるにすぎない。そんなものを真剣に勉強して何になるか」

と言って、くつてかかる運動家もまたいましたからね。そういう時ですから、およそ学問でありうるために、マルキストでなければいけないのか、という疑問だつてあります。それに対して、そうじゃないと。

「今はわからなくても、学問の道をひたむきに行き、そしてキリストに深くわけ入って行けば必ず答が見つかるから」

と言われた。僕にとつてはそれが本当に有りがたかった。人生の問題でも、キリストにつながる道を本当に幅広く豊かに教えていただいた。切り拓いていただいた。

『あれをしてはいかん、これをしてはいかん』ではない。本当の世界は自由だ」

と。学問にも関わりますけれども、よく先生はこう仰った。

「世間では、キリスト教を信ずれば視野が狭くなるという——つまり近視眼でそれしか見えない——それは間違いだ。本当にキリストの世界に深く入れば、非常に広やかな自由なものが見方ができるようになる」

と。それはなぜかと言いますと、人間というのは自己にとらわれている。我執、自我と言います。誰でもが自分が大事なんです。「自分、自分、自分」で生きている。さきほど、人間社会というのはドロドロしてどうしようもないと申しました。その実体は何かというと、エゴとエゴのぶつかり合いなんです。

「自分は他より偉くなりたい。自分はあれよりは立派でありたい。そこに自分の存在価値がある。それにひきかえあの嫁は。私はもつと働いているのに、あの嫁は全然働

かない」

とか、そういうふうに関自分を規準にして他を審く。自分が劣っているれば、ひがむ、ねたむ。不平等であると言つてこぼす。すべてそういうことのぶつかり合いで、闘争というものがこの世の中を支配する。これが人間の常なんです。それはもとへ帰れば、自分というものに囚われているからだ。

●南無キリスト

キリスト教では、「罪」ということをさかんに言いますね。「原罪」といったり。アダムとイブが罪を犯して、それが遺伝のごとく今まで我々の中にしみこんでいる。何で日本人の我々が、どこか知らないアダムとイブの犯した罪を遺伝的に受け継がねばならないのか、さっぱりわかりませんけれども。キリスト教では「原罪」と言う。

「人間は罪びとである。だから救いを要する」

と。キリスト教の方で、牧師さんや宣教師さんの仰る罪とは何かというと、

「人間が心にいろいろ汚い思いを抱いたとか、憎しみを抱いたとか、あるいは、具体的な過ちを犯してしまったとか。心の思い、自分の行動、言葉、そういったものにおいて神さまの御意にそわないことをやっている、その一つ一つが罪だ」

と、こういうふうに関わつた。だから、本当にまじめなクリスチャンは毎晩懺悔するんですよ。僕なんかにはとてもできない。一日をふりかえつて、

「神さま、今日は朝から晩までこんな悪いことをいたしました。どうぞお許してください」

と。毎晩毎晩あやまるのはもう堪忍してほしいと、私は思いました。ところが、小池先生が仰つた「罪」というのはそうじゃないんです。

「自我、自分自身が罪だ」

と仰つた。これは、ある意味では、すごくきつい宣言なんです。自分自身が罪だと言う。

「生まれてきてすみません」

という、あの太宰治みたくに。自分自身が罪だと言う。しかし、よく考えたら、そうなんです。汚い思いをいただいた。それは自分が抱いた。何か変なことをしてかした。それは自分がやつたんです。結局、そのしでかすのは枝葉の話で、根源は何かという自分自身なんです。

「自分自身がどうしようもない。それに気づきなさい。自分自身が罪であつて、どうしようもないやつだと、それに気づきなさい」

と先生は言つてくれた。「どうやつたら、救つていただけるのでしょうか」と。

「キリストが全部、引き受けてくれたから、大丈夫だよ」

と。どんでん返しですね。キリストが全部引き受けてくれた。

お釈迦さまは、大慈大悲です。お釈迦さまが涅槃の境地に入られるときに、みんなの衆生の悩みを全部引き受けて、悟りの世界に入つた。だから、お釈迦さんのご本願によつて救われる。

「衆生 悉く仏性あり」

です。「衆生悉く、本当に気づけば、救われた存在だよ」というのが本当の仏教のころだと思ふ。小池先生は、キリストの世界では、

「キリストが十字架というあの犠牲において、あの十字架で、まったく罪なき神の子であつたキリストが我々人間の業を背負つてくれた」

と言われた。私は、「罪」という言葉よりも、「業^{ごう}」という方が日本人にはピンとくると思う。そういう人間の業をキリストが十字架で全部引き受けてくれている。

「だから、あなたはもう毎晩、毎晩、懺悔しなくてもよろしい。もう10年分も20年分も、過去・現在・未来全部、キリストがご自身で引き受けてくれた。それだけを受けとればいいんですよ」

「ああ、そうですか。要するに、囚^{とら}われがいかなのですね。囚われを捨てようと思っても、捨てられないのが人間の罪なんですね。それが業^{ごう}なんですね。そうですか。それをキリストさまが全部片づけてくださった。これは有難い教えです」

と。ちょうど、親鸞上人に対して、

「あなたは、法然上人のお言葉の通りにただ南無阿弥陀仏だけを称えて、それでニコニコなさっているけれども、そんなウソだったらどうするんですか。ひよつとしたら、ウソかも知れませんか。南無阿弥陀仏だけを称えて浄土へ往けるなんてウソかも知れない」

というようにことを言いだした。そしたら、親鸞さんは、しゃあしやあと、

「いや、結構だよ。私は他に道がない。どうせ地獄^{ひじょう}必定の身である。私は、放つておけば、地獄行きが決められている。己自身がそんな悪いやつだ」

と仰いました。それを「南無阿弥陀^{なむあみだぶつ}仏」と、弥陀の本願にすがる。

「南無^{なむ}」というのは、「祈り入る」ということだそうです。「阿弥陀^{あみだ}」というのは「アミッターヤー、アミッターバー」といって、「無量寿、無量光」のこと。「仏^{ぶつ}」は悟りを開いた方、お釈迦さまで。「素晴らしい光と生命のお方の中に帰依^{きえ}していく」というのが「南無阿弥陀仏」です。だから、「南無阿弥陀仏」というのは素晴らしい言葉です。南無阿弥陀仏と心をこめて祈る時にそのお釈迦さまの中に抱きとられて、自分も仏になっている。そういう深い意味がこめられた言葉なんです。言葉というのは本当に凄い力を、生命を持っている。それを本気で「南無阿弥陀仏」と称えれば、その世界に入るといえる。それで、小池先生は、

「南無キリスト」

と仰います。「南無キリスト」と仰る。日蓮さんだったら、「南無妙法蓮華経」でしょ。妙法、素晴らしい法の世界ですね。仏さまの世界は仏法の世界です。その妙法の中に帰依していく。

小池先生が仰る宗教の世界は全然、垣根がない。本ものならば、すべて尊ぶ。

「どうぞ皆さん、本ものになってください。仏教の方は本ものになってください」

と仰る。道を開いた方々、親鸞さん、法然さん、日蓮さんが、あの鎌倉時代の大変な時代に大変な戦いをして開いた道、生命賭けで開いた道、それが今に伝わっているわけです。だから、

「信者の方々はみんなそこへ帰ってください。そこで本当に南無阿弥陀仏を称え、南無妙法蓮華経を称え、その方々と同じ光の世界に入ってください」

というのが、小池先生の語りなんです。ご自分は、

「私はキリストに救われた。だから、私は、南無キリストだ」

と仰る。それで、私は小池先生の流れですから、「南無キリスト」なんですね。

●鐘は上からぶら下げられている

さっきの学問の話に戻りますと、要するに、学問をするのに己が立ったらだめなんです。学

問をするということは、真理を真理としてそのまますなおに受けとる。色がついたらだめです。色眼鏡でものを見たら、見えないんです。無色透明の光で見ると、それを小池先生は、

「太陽の光を見よ。太陽の光は無色である。無色の太陽の光が水滴に当たると、七色の虹になる。水滴も無色、太陽の光も無色。無色の水滴と太陽の光が交差すると、あの七色の不思議な虹が現れる」

と言われる。あの大海原も青々としてますけれども、あれは無色なんです。太陽の光の具合で、あのようになまっ青な海が現れたり、まっ青な空が現れたりする。だから、小池先生は、その無色、色のつかない本当の——天然色とはそのことです——天然の光が素晴らしいと言われた。その天然の光でものを見る。それを我々に即して言いますと、自分というものの主観、己から解き放たれたその光でものを見る。歪みなくものを見る。

だから、先生は、あるとき自分の雅号を「天鐘」と呼ばれた。天の釣鐘です。その意は何かといいますと、西洋の鐘は、教会堂の鐘は中にベロがあつてガランガランと鳴ります。東洋の鐘は、ゴ〜ンと余韻を残して鳴ります。

「鐘を見てごらん。足場も何もない。もし、鐘が何かで支えられていたら、打つてもコツンというだけで鳴らない。天のあの釣鐘は中が空っぽだ。天空に抱かれ、天空を宿し、そして、撞木で突けば、妙なる響きを発する。鐘が鳴るのか、空気が鳴るのか、わからないが、それが本当の姿だ。鐘は上からぶら下げられている。自分の足場、立場をもたない」

と。上からぶら下げられている。これが天です。先生にしたらキリストになるし、仏教だったらお釈迦さまになります。そういう、自分を越えた大なるもの、自分を越えた大なる素晴らしい根源なるお方、そのお方に首ねつこをつかまれて、上からぶら下げられて、

「はい、全部、明け渡します。私は何の抵抗もいたしません。私は空っぽでございます」

と言ったときに、初めて素晴らしい音色が出てくる。これだということに気づかれたんですね、除夜の鐘を聞きながら。それ以来、もうすっかりそれが気に入って、「天鐘」としばらく自分の雅号を名乗っておられました。

そのように、先生がものを見る見方というのは非常に広やかなんです。仏教の世界にも非常に詳しいし、大自然に対しても本当に先生は詩人の心で自然を見ておられます。太陽の光を見たら、そういうことですしね。ですから、非常に色がない。別な言葉で言いますと、宗教臭くない。キリスト教臭くない。「それが本当だよ」と言われる。

●鳥を見れば鳥となる

先生は非常に子どもを愛されました。童心を。

「ヨーロッパ旅行なんかすると、どの国の子どもも本当に子どもは可愛い、子どもには国境がない」

と仰った。イエスさまも非常に子どもを大事にされた。先生自身も、晩年最後まで童心を失わなかった方ですね。幼な子の中に何か非常に光を見るといふか、神さまの光を見るといふ、そういう思いで幼な子を見ておられた。

もちろん、子育てをなさる若いお母さん方はそうは言っていられません。ギャンギャン泣かれたら、それはもうお母さんとしたら、たまらんでしょう。それは別な話ですけども。でも、

本当に子どもは、にこやかに無心に笑っている姿、戯れている姿、走っている姿、それはどれひとつとっても本当に自然であって美しい。大人はそれを失ってしまった。思い煩いがあるからです。子どもは思い煩いがない。大人は思い煩いがあつて、無心になれない。だから、どうすれば無心になれるかといって、またいろいろ修養をつんだりするわけです。

自分というものをはずれて、自分の主観とか、自分がこれをやつてやろうとか、野心だとか、そんなものが何もない。ちょうど、山がある。山が素晴らしいから、そこへ引きつけられて登る。山があるから登るんだというように。花が素晴らしいから私は花に魅せられて花と一つになるんだという、先生の芸術はそういうものだった。詩であろうと、何であろうと。芸術の世界では、対象と一体化してしまう。

「雲を見れば雲となり、花を見れば花となり、鳥を見れば鳥となる。そういう境地で、鳥が飛んでいるときに、自分も飛んでいる思いで見ている」

と。そういうことをよく言われた。だから、

「自分はもし、今度生まれてくるなら何になりたいかと問われたら、鳥になりたい」

と言われた。私はやはり人間がいいと思いますけれども、先生は鳥になりたいと言う。非常にロマンチックなところがあるわけです。それから、虹が好きでした。若いときに赤倉で療養しておられたときに、素晴らしい虹が出たそうです。その虹が、晩年になつても、90歳になつても忘れられないと言つておられました。そういう方だったんです。

●蔵書は先生の分身です

そういうことで、私と先生との出会いというのはそういうところから始まつて、1959年から先生が向こうの世界へ往かれる1996年まで、ずっと先生とつながっておりました。先生が亡くなられてから今年で8年になります。

先生のお生まれというのは1904年です。今年が2004年ですから、非常に不思議なことに、今年は生誕百年という非常に記念すべき年に当たります。奇しくも——先生が天国へ行かれたのが1996年の8月29日でした——その昨年の8月29日にこの小国町愛蔵書センターというのがオープンした。これも不思議なことでございます。そして、今年が一周年記念のこの講演会が企画されました、それが生誕百年に当たるということです。

先生は、さつきから申しましたように、非常に自然を愛しておられた方です。野尻湖の近くに大学村というのがありまして、そこに別荘をお持ちであつた。夏はいつもそこで仕事をしておられました。奥さまとご一緒に行かれて。野尻で自然に親しんでおられた。

「もう東京の街の中はいやだよ、いやだよ」

としよつちゆう言つておられました。武蔵野も昔は素晴らしい田園地帯だったんでしょけれども、拓けてしまつてから今は昔の面影はない。

野尻の山を愛しておられた、その先生がこの小国町愛蔵書センターという所に先生の分身ともいえるような蔵書が保存されるというのは、これはまた素晴らしいことだなあと思う。私も弟子としては、先生のせつかく持つておられる本をどうしたらよいのか。誰も個人では引き取ることができません。寄付するといつても、どこも引き取つてくれない。そういう時代なんです。非常に悩んでおりましたときに、こういつた形で愛蔵書センターというものができ、そこへ武蔵野市から移管していただいて、そこで保存していただける。皆さまのご利用の便

に供していただけるということを一番喜んでいるのは小池先生ご自身だろうと思います。

先生という方は——私はある面では腹がたつことがある——御礼や何かでお金をさしあげても、全部本に化けるんです。そんなに読めないではないですかと言っても、

「いやいや、持っていることに価値がある」

なんて仰る。それは奥さまの立場からしたら、たまりませんよ。奥さまからしたら、

「必要なものだけはいくらでも買いなさい。読みもしないものは無駄ですよ」

というのが主婦の論理でしょ。私の家内であれば、しょっちゅう言います。第一に収納場所がない。重くてしょうがない。日本家屋では潰れてしまいますよ、本の重さで。私なんか、しょっちゅう無駄なものは買うなど言われておるんですけれども、小池先生はお金が入ればもう本に化ける、というお方でした。

だから、愛蔵書センターで保管していただいた本以外にかなりの本がどこかへ分散したはずですよ。もっと早くからこのことがわかっていれば、もっともっと貴重書も保存していただけたと思うんですけれども。

それから、何を隠そう、私も凄い宝物をいただいているんですよ。それはルッター聖書です。1700年代に出版されたそれを小池先生が西荻窪の待晨堂という本屋で見つけて、相当高額だったと思うんですけれども、それを手に入れた。ぶ厚いルッター聖書、重い重い大きな本です。それを小池信雄さんが、

「いや、この聖書はやはり奥田先生に受け継いでいただくのが一番父が喜ぶのではないか」

と言って、私に下さった。私は大事に大事に保管してある。それは旧約聖書から新約聖書までのルッター訳の聖書で、そこへルッター自身が注釈を加えている。そして、ルッターの祈りというのが必ず一章ごとについている。だから、私はもう少し自由な人間になったら、まずその本を読むのに没頭したい。10年いただきたいと思う。でないと申し訳ない。そういう貴重本を私はいただいております。ですから、不思議なご縁でございますけれども。

●精神一到何事か成らざらん

今日は、「小池辰雄 その人物と業績」というタイトルのお話でございます。小池先生の生い立ち人となりは、今かなり申し上げました。それから、教育者としての小池先生、学者としての小池先生、詩人としての小池先生、それから宗教家——宗教人ですね——キリストの僕としての小池先生。そういったポイントをお話したいと思っております。

まず、先生のざっとした生い立ちのようなものですが、これは今日皆さんが手になさったこのリーフレットにもごく簡単に書かれております。一番最後の頁に、

「小池辰雄。1904年2月7日、東京に生まれる」

と。そして、お亡くなりになったのが、

「1996年8月29日、往生」

と書いてある。この「往生」という言葉は、先生は、

「私が天に召された時に、あなた方は『小池は死んだ』とは絶対に言わないでほしい。

次の世界に生まれ変わって生きるんだから。往生するんだ。肉体の小池は消えても、霊体の小池は生き続けるんだから、別な世界に、高次の次元の世界に自分は入ってい

くだけだから、死んだなんて絶対に言わないでくれ」

というふうに口をすっぱくして仰っていました。私は、先生を納棺して火葬場で最後に火の中へ送ります時に、「万歳！」と唱えたんです。もう思わず、

「先生、ばんざーい！」

と。お家から出棺される時もそうでした。見事に役割を果たして凱旋されたという、そんな気持だったから、「ばんざーい！」と叫んだ。それを先生は喜ばれると思いました。そういった92歳のご生涯をたどられたわけです。

愛蔵書センター一階の展示室に、こういう黄色いパンフレットが置いてありました。今度、そこを訪れたときに、是非これをお手になさっていただきたいと思います。ここにもう少し詳しく小池辰雄先生のこと紹介されています。それを若干、借用いたしますと、

「小池辰雄は1904年2月7日、東京本郷弥生ヶ丘(弓町。現在の文京区本郷二、三丁目)に父小池政吉、母光子の四男として生まれた。五歳のとき父親を病気で亡くし、ほとんど母によって育てられた。辰雄は泣き虫弱虫の『ずくなき』子であった。」

と。お父さまは新潟の佐渡のご出身です。新潟県に縁のあるお方です。佐渡のご出身で、鉱山技師をなさっておりました。もつと長生きなさったら、素晴らしいお仕事をされたと思いますけれども、若くして、先生の5歳のときに——長男の政美^{まさみ}兄さんが13歳です——そのときに天にのぼってしまったということで、先生にとってはお父さまの記憶というのは非常に薄いそうです。それだけに、お母さまに大変世話になっておられる。それから、長兄の政美さんが8歳上ということで、父親代わりに先生の面倒をみておられた。とても親孝行な素晴らしいお兄さんだったということです。

「兄政美と母光子、この二人は終生、自分の恩人である」

と言われた。ところが、そのお兄さんはわずか26歳1か月で亡くなられる。そういった非常に、先生の若き日というのは苦難に満ちておりました。パンフレットにもどりますと、

「母光子は女学校——のちのお茶の水女子大学になります——の教員をしながら苦勞して五人の子供を育てた。『精神一到何事か成らざらん』の言葉をモットーとするような一面厳しい母であった。」

この言葉は私も子どもの頃、よく聞かされました。「精神一到何事か成らざらん」と。英語だったら、

“Where there is a will, there is a way.”

「意志あるところに道あり」という。不撓^{ふたう}不屈。それをお母さんは貫いたお方だったようです。

「光子は17歳のとき、江戸に出て勉学をしたいという志を親に打ち明けたが、その望みがかなわぬと知ると、ある夜、夜陰に乗じて出奔^{しゅっぽん}した。故郷の信州松代を出て小諸まで来たとき、家から二人力の人力車で追ってきた使いに、『どうしても帰れというなら、私の首を持って帰ってください』と言いつつ放った。」

と。17歳の少女が追手に対して、

「私の首をささつと持って帰りなさい。私はてこでも動きません」

と、座り込んでしまったというんですね。

「そんなに学問したいのか、そんなに勉強したいのか。わかったよ。私が謝ってあげるから、行つてらっしゃい」

と言って、追手の方が逆に路銀を与えて励ましたというエピソードがある。これは先生がお母さまから何度かじきじきにお聞きになったということで、私もそのお話をよく聞きました。

●兄貴の分も戦わなければ

それから、お兄さんの政美さんという方は、これはまた優秀な方だったようです。一高東大の法学部をトップクラスで卒業なさったそうです。そして、大蔵省に入って、財務官補、書記官として北京の日本公使館に赴任される。出向です。そこで不幸なことがあったわけです。この兄さんに大変影響を受けておられます。

「一番上の兄政美は頼もしい兄だった。兄は身体強健、学力優等で、一高東大で特に英語がよくできた。英語の代名詞みたいなものだったという。8歳年下の辰雄の面倒を何かとみてくれた。辰雄は中学生のとき、病気で学校を休んだ際、兄から英語を教えてもらい、そのおかげで英語の実力がクラスで一番になるほどだった。」

この兄さんが内村鑑三の影響を受けて、キリスト教に入信された。その時に、兄さんが師事しておられた先生は藤井武という、内村鑑三の一番弟子のお方だった。そのお方の所へ行っておられた。やがて、その影響で、小池先生も藤井武先生を自分の恩師と呼ぶようになる。

キリスト教に入信してから、また一段とお兄さんの態度が素晴らしく変わったという。つまり、お母さんに対しては孝行そのもの。兄弟の面倒をよく見るという、そういう方だったようです。そして毎晩、9時になると、欄干にもたれかかって窓辺でお祈りをなさっていた。毎日、聖書の頁が変わっていく。けれども、弟の辰雄少年は、

「何だ、耶蘇教^{やそ}なんか。俺は絶対いやだよ」

と、そういう生意気な態度なんです。でも、兄さんは一言も「お前はキリストを信ぜよ」とか、そういうことを仰らなかつた。ただその態度を見ているだけで、兄さんというのは素晴らしい人だということはわかったという。そして、お兄さんが亡くなってから、弟は目が醒めるわけです。そういうふうな関わりでございます。

その兄さんが北京に向けて1920年11月に東京を旅立って、北京に赴任し、翌年の9月に悪性腸チフスで仆れる。一年に満たない間にこの世を去ってしまう。北京滞在が一年足らずだったという。だから、非常に先生は、

「兄さんは北京へ行くべきではなかつた。本来はロンドンに赴任することに決まっていたのに、内部の事情で、上役の差し金で北京にまわされてしまった。それが運のつきだった」

と言って、最後まで先生はそのことを悔やんでおられました。

「私は兄貴の分も戦わなければならぬ。無念に仆れた^{たお}、多分もつともつと生きて働きたかったであろう兄貴に代わって、自分は弔い^{とむら}合戦をするんだ」

と、常々言っておられました。

お兄さんが北京で重い病気になったというので、お母さんと次男の龍二さん^{りょうじ}という兄さんが病院へ駆けつける。もうそのときは危篤状態です。そして、お母さんに

「白衣のキリストさまが迎えにこられました。お先に参ります。おゆるしください」

と言って、三日後に亡くなられたという。もはや、兄さん自身は怨んでいないと私は思う。キリストが迎えにいらつしやつたんだから。怨んでないけれども、残された弟辰雄にしたら、た

まらんわけです。

しかも、お母さんは過労と心痛のために帰りの黄海の船の中で失明(緑内障)してしまわれた。東京駅にお迎えに行かれたら、お兄さんは遺骨となって白い箱の中に抱かれて、失明のお母さんは手を引かれて帰ってくる。それを東京駅で迎えたときの先生は胸が詰まるというか、本当にもう天地晦冥(かいめい)でまっくらです。それはそうですよ。お母さんは失明なさって、もうあとは働けない。お兄さんは一家の大黒柱だったのに仆(たお)れてしまった。これから誰のお世話になつていくかという、まずその問題があります。それで家をたたんで、叔父さんの家に世話になるという状況になります。

●内村鑑三の大集会に出席

先生は第一高等学校(二高)にあこがれていた。兄さんが一高へ行っていたし。ところが、叔父さんに世話になつている身だから、一高を受験して失敗したらいかんからと、水戸高校を受験する。立派な学校だと思います、私からみたら。そこへ入られた。あの頃は全国共通試験で、その順位によって自分の好きなところへ行けるそうなんです。自分は三番だったので一高へ十分入れたのに、水戸高校へ行つた。だから、悔しくて悔しくて、結局、病気になつてしまった。悔しいから病気になつたのではなくて、自分の気がのらない水戸で、東京から離れたところで生活する。行ったり来たりする。そんなこともあつてでしょうか、非常に重い病気に罹つて、結局、一年休学してしまう。

その休学中に、お兄さんの残した本棚から本を取った。それが内村鑑三の『宗教と現世』という本だった。その中に、

「宗教は人生の最大の関心事である」

という言葉が出てきて、非常に共感したという。内村鑑三のハートと小池辰雄のハートがそこで響きあつた。そして、健康をとり戻すと今度は、内村鑑三の――あの頃は東京大手町の大日本私立衛生会講堂というところで、内村先生はたくさん500人あるいはもっと多くの聴衆を前にして聖書講義を日曜毎にしておられた――集会に出かけた。これが1923年です。お兄さんが亡くなったのが1921年でしょ。翌22年に水戸高校へ入った。

「辰雄は1922年4月、旧制水戸高校に入学する。その年の初夏、急性腸カタルで入院し、死生の間をさまよう。一か月後、退院する。一年休学。秋、兄の書架から内村鑑三著『宗教と現世』を取って読み、特に「青年に告ぐ」の一文にとらえられ感激する。新約聖書に初めてくらくいつく。これが入信の端緒となる。翌1923年2月、内村鑑三の丸の内大手町の大集会へ初めて参会する。」

その時の講演では、「山上の垂訓」の第一句、

「福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものである」

の垂れ紙が掛けられていたそうです。それが非常に不思議な出会いであつたという。

先生はのちに読売新聞に、「信仰の旅路」という随想を書かれたことがあります。宗教欄に3回連載された(1966年7月10、17、24日)。その一番始めに「内村鑑三と私」という見出しがありまして、そのときのこと書いてある。

「体力がやや回復したので、1923年2月25日、丸ノ内大手町なる大日本私立衛生会講堂で開かれている内村先生の聖書講義を聴きに行った。その日の印象が妙に焼き

つけられてある。私は中央に近いあたりの席についたが、会場には続々と来会者が集まってくる。やがて階上まで満堂となるには驚いた。壇上には大きな紙が二枚たれさがつていて、それには山上の垂訓のはじめの二句が墨書してあった。

「福^{さいわい}なり、心貧^{こころ}しき者は、天国は其人^{そのひと}の有^{もの}なれば也」

「福^{ふく}なり、哀^{かな}しむ者は、其人^{そのひと}は安^{やすみ}慰^{なぐさめ}を得^えべければ也」

とあった。講演内容がどのようなものであったかを今思い起こすことはできないが、すでに先生の書に親しんでいたから、先生の生きた言々句々を全身をもって受けとめることが出来たようである。そのとき歌われた讃美歌の一つに、あのチャールス・ウエスレーの有名な“Jesus, lover of my soul”¹「わが魂を愛するイエスよ」があつたが、これは一般の讃美歌273番に収録されている讃美歌です。

私の心をそのまま歌ってくれているこの歌は、涙にかすんで、しばしば声が出なかった。この歌は今も愛唱歌の一つである。

内村鑑三全集(岩波版)第17巻の、この日の先生の日記をひもといてみたら『今日は馬^マ太^{タイ}伝五章三節四節を講じ、自分ながらに有難た涙に咽んだ。イエスの御言葉の意味の深さに今更ながらに驚いた』²とされるである。内村先生と私のつらなりはこの日にあり、この句にあるといつて過言でない」。

と。こういうふうなことが書かれてある。それから、やがて藤井武先生との出会いがあります。

「私はその後も幾回となく先生の大集会に列席はしたが、高校時代は病弱であつたので中断されることが多くあつた。しかしやがて信仰的な一進展があり、東大にはいつてからは健康となり、先生の高弟藤井武先生の門下となつて、先生の死に至るまで無欠席でその家庭的な集会に列席した。内村先生によつてまかれた種子は、この藤井先生によつて根をはり、芽をふき出し幹となりつつあつた。」(小池辰雄著作集第六巻『随想集』452〜453頁参照)

藤井武が1930年(昭和5年)に亡くなられるまで、藤井先生のもとに通われたわけです。実は内村鑑三も1930年に亡くなられた。内村先生は確か3月26日、藤井先生は同じ年の7月14日にお亡くなりになります。この二人の素晴らしい、先駆者といえますか、人物が1930年にあいついで天に帰ります。

そのあとは、塚本虎二という——これまた無教会の素晴らしい聖書学者です——その方とこころへ行かれて、そこのお手伝いをされた。そんな経路をたどっております。

それから、職業的な面で申しますと、ドイツ文学の方の道を選ばれましたから、当然、ドイツ語の先生をなさる。終戦後は、旧制の第一高等学校の教授、そしてその後、それが教養学部³に改組されます。東京大学の教養学部の教授として1964年、60歳の定年までお勤めになります。定年後は、天野貞祐^{ていゆう}という——これまた大変な哲学学者ですけれども、文部大臣も2年ほどなさいましたが——その天野先生の招きで、獨協学園へ移られます。獨協大学でドイツ語、ドイツ宗教史を担当され、やがては、天野先生の懇願によりまして、獨協中学・高等学校の校長も10年間歴任されます。そのような経過をたどっております。

●キリストは無者

先生の人物というものの概略をいくつかエピソード的に申し上げたいと思います。先生のキ

リスト教の非常な特色は、キリストのことを「無者」と呼ぶことです。「無者キリスト」と言われる。一体、「無者キリスト」とは何でしょうかと、普通、不思議に思うんですね。この「無」というのは——私が京都大学で聞きました講演の時にはその話が出てくるけれども——先生は「無」という漢字の成り立ちを調べたら、それは

「てんがい天蓋の下のにじゅう甘と甘の林」

という。大空の下に二十と二十の林があるということ。「二十、二十の林」があるというのは、「無数の木」がある。つまり、無数の木を「無」という字が表している。即ち、無というのは虚無ではなくて、充滿している。空気がこの部屋に充滿しています。見えません。気づきません。けれども、充滿しているんですね。

「無というのはいわゆるニヒリズムの虚無ではなくて、充滿していて限定できない。たとえば、キリストのことを『愛』と言ったら、それで限定される。キリストは、愛でもあり、義でもあり、真理でもあり、生命でもあり、いろんな素晴らしいファクターを全部、内含している。無限無量である。無限無量を『無』という言葉で自分は表したい」

と。それが一つの特色です。無限無量で限定できない。「無限定だから、無と言わざるをえない」というのが一つ。それから無というのは、キリストの姿を先生は見ておられて、こう言われた。「キリスト、あんなに素晴らしいキリストが、実は神さまの前にまったく自分をナッシングに、何ものともしていない。

『自分は何ものでもありません』

と言って、神さまの前に完全に頭をさげている。あの素晴らしいキリストが、
『自分からは何も教えることはできない。神さまが自分の中で語れと言っておられることを語っているだけだ』

と仰る。いろんな奇蹟の業わざをなさったが、あれも

『神さまが自分の中でせよと仰るから、その通り動いたら、そのようになっているだけだ。自分ではない。自分は何ものも教えるものも持たないし、教える言葉も持たないし、なすべき業も自分からは出ない。全部、天界の神さまから自分に流れてきて、自分の中に充滿して、それが現れていく』

と。ああいう不思議な業となつて展開する。不思議な言葉となつて、人の心を打つ。キリスト自身がナッシングなんだ。まったく神さまの前に自分を空っぽにして投げ出しているキリストの中に、神さまが100%に充滿して、そして、あのように素晴らしい業となつて現れた。だから、無私、私無きひと。キリストは無私なるひと、私心無きひと、自我のないひと。

自我を立てない人と言った方がいいかもしれません。自我はありますよ、キリストだって人間だから。けれども、それを立てない。自分をつぶしかかっている。そして、神の前において自分は空っぽで、平伏ひれふしです。

『私の思いではなくて、神さま、あなたのみ思いを私を通してこの地に成らしめてください。私はあなたから遣わされてこの地上にやって来たんですから』

と、それがキリストの自覚です。遣わされた者、それが僕しもべという自覚で、僕は主人の思いの通りに動く。それが暴君ではない。愛なる神さまです。その御方むねのみ旨の

ままに動く。だから、あのキリストの素晴らしい業わざがそこに展開していった。だから、私はキリストのことを『無者』と申し上げている。無者＝無限無量者、ゼロ＝無限大だ。」

と言われる。

●人間が空っぽになる

極小と極大なんです。これは自然科学の世界でもそうらしい。極小の世界はまた極大の世界につながるそうです。コンピュータの集積回路はだんだん小さくなっていますね、初めは大きかったでしょ。計算機でも何でも大きかったものがだんだん小さくなります。IC回路なんていうものはどこにも入ってます。ああいうふうに、本当に凄いものは本当に極小になっていく。原子力だとか、核だとかいう、あの極小は我々にとっては大変困りますけれども。

人間は、さつき申しましたように、神さまとつながっていないと、頭ばかりが発達して、それと悪魔とが手を結ぶと、人を殺す、人類を滅亡させる。そちらに全部使われてしまう。「サリン」だってそうです。その他さまざまのものが全部、人間を不幸にする、殺す道具に使われてしまう。素晴らしい薬品であろうと何であろうと、それを手にすれば、ほとんどすべての人を幸せにできるんでしょうけれども、それを悪魔の手下が手にいれると大変なことになる。だから、人間というものは、本当に神さまの前に、キリストのように平伏して、

「ただただ、御意みこころを成させてください」

という、そういう人にならなければ。

私は京都の琵琶湖の近くに住んでいますけれども、水源は琵琶湖です。琵琶湖に放射能を放り込まれたら、もう我々は水を飲めなくなってしまうんです、琵琶湖が汚染されれば。それは日本中いたる所でも言えます。この美しい日本の国がもし変なもので汚染されて、その影響力がチェルノブイリみたいに猛烈に広がる影響力のあるものによつて汚染されたら、我々は生きていけません。これは脱線ですけども。

世間のキリスト教は、

「キリストは神の子だ。キリストは立派だ」

と言って、当たり前みたいに、「立派だ、立派だ」と言っている。神の子だから何でもできたのは当たり前だと。先生はそうではない。

「キリストも人の子だ。人間だ。ところが、人間イエスがあのように神さまの前に徹底的に己を空しうしている。その姿にうたれた」

と仰るんです。そして、さっきの、

「幸いなるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」

という言葉は、「山上の垂訓」と普通は言われている。「垂訓」というのは、「教えを垂たれる」と書くので、教訓のように世間では受けとる。だから、神棚まつに祀り上げたくなるわけです。

「とてもできない相談だ。『悲しい者が幸いだ』なんて、そんなバカなことがあるものか。笑っている者が幸いに決まっているではないか。富める者が幸いに決まっているではないか」

と言って、人はもう相手にしない。けれども、あの内村鑑三も感動した「幸いだよ、心の貧しい人」は、原語では「霊の貧しき人」と書いてある。霊、魂なんです。先生は、

「魂が貧しい者、これはキリストの姿だ」
ということに気づかれた。

「キリストは説教しているのではない。自分の姿を告白している。キリストは説教なんかしない。全部、神さまと自分の関わりの中で、自分の中に起こっている姿、自分の内面の姿をそのまま告白している」

と捉えた。だから、あの言葉は、キリストが、

「私は神さまの前に本当に空^{から}っぽになった。そして今、空っぽになっている。そうしたら、ありがたいことに、神さまという天国が私の中に充滿して、私を好きなように用いている。素晴らしいことをなさってくださる。だから、神さまの前には霊が空っぽの方がいい。自分がサムシングにならない方がいい。自分は何者でもありませんと、本当に開^あけっ広げがいいんだ」

と。そのように響いて来た。ところが、さて、自分がどのようにキリストのように空っぽになれるか。これが次の問題なんです。キリストはなりましたが。

●どん底に立たれるキリスト

よく、キリスト教会では「洗礼」と言いますでしょ、「バプテスマ」と。イエス・キリストも伝道の始めに、洗礼のヨハネという、6か月先輩にあたる方からヨルダン川で洗礼を、バプテスマを受けている。ヨハネにはパツと、「これは神の子だ」と見えましたが、

「とんでもない、あなたは私が洗礼を授^{さづ}ける方ではない。私の方があなたから洗礼を授けていただくそのお方なのに、とんでもありません」

と言って、ヨハネは断る。ところが、イエスはその時に、

「いやいや、私にもそうしてほしい。私も普通の人間だ」

と言って、ヨルダンに身を沈めた。そして、水から上がって祈っておられた時、霊界が、天が開けて、聖霊が鳩^{はと}のごとくくだった。そして、

「これこそ我が喜ぶもの、わが心にかなう者」

という、天から御声^{みこゑ}がきた。その「我が心の喜ぶ者」というのは、空っぽなる世界、霊の貧しい姿です。

「私は何者でもありませんと言って、神さまを百とし、自分をゼロにしている。その姿を神さまは喜んだ」

と、そう小池先生は受けとったんです。ところが、自分は空っぽになれない。どうしたら、自分は自我を捨て、本当に神の前に空っぽになれるのだろうか。煩惱というのは、取ろうと思っても、なお自分を支配する。それで悩んでいたときに、あの言葉が今度は、

「幸いだよ、辰雄よ。私の十字架で既に霊貧しくされているではないか、お前は。幸いだよ、わが十字架によって既に霊貧しくされてある辰雄よ。天国なる我、復活の我、聖霊の我、汝のうちにあり」

と、こう響いてきて、思わず全身が痺^{しび}れて、畳の上にもぶつ倒れたという。それくらい、それは凄^{こゝろえん}い霊的体験だったという。だから、小池先生の講筵^{こうえん}には必ずそれが出てきます。

「幸いだよ、霊の貧しき者は。天国はその人のものなり」

と。そして、

「無者＝無限無量者」

という。しかも、それは人間は無になれない。禅宗だったら、悟りで無になります。しかし、そんなことは全ての人に可能ではない。だから、自分でどうにもできない我がというもの、業ごうというものを、それを実はキリストが我等に代わって全部引き受けて、十字架に掛かってくれたんだと。

キリスト教では、「罪の価は罰(死)」なんです。残念ながら、審きということになっている。神の御意みこころにかなえば天国。神のみ教えに背そむくなら地獄。こういうように相場は決まっているんです、モーセのときから。

人間は「義ただしくありたい、正しくありたい」と一生懸命でやるんだけど、そこに偽善というものが生まれてくる。キリストはそれを弾劾された。偽善ではだめだ、本当に内面のうるわしき、内面の姿を神は見ておられると。キリストは本当にそういう方です。ところが、人間はそうではない。

ヨルダン川で身を沈めたバプテスマを小池先生はこのようにお話くださった。おそらく、これは先生ひとりでしょうね。キリスト教界にこんなことを言う人はいないと思います。

「ヨハネからキリストがああバプテスマを受けたのは、まともな悔改くいあらためができない自分たちに代わって、悔改めをやってくださいったんだ」

と。キリスト自身は、悔改めなんかまったく必要のない方なんです。小さいときから、神さまの懷で育ったような御方です。祈り深い御方ですから。ところが、我々に代わってキリストはヨルダン川に身を沈めてくれた。しかも、ヨルダン川というのは地球上で一番低い所を流れている川です。海拔以下の所を流れている川だそうです。そこに身を沈めるということは、一番自分がどん底に立つということ。衆生しゅじょうの悩みとか苦しみを、まずそこで悔改めという段階で、既に身代わりになってくれている。そして、極めつけは、あの十字架の上で、

「父よ、彼らを赦したまえ。その為すところを知らざればなり」

と、自分を十字架につけた者たちのために、執り成しの祈りをして、

「私の霊を御手にゆだねます」

と言って、息を引き取った。それを見守っていたローマの軍人が、

「ああ、この人こそは本当に神の人だった」

と言って、心うたれたという場面があります。

●みこころをなさってください

キリストは、その十字架にかかる前に、あのゲッセマネという所で本当に苦しんで祈られた。

「どうしても、この杯さかずきを、十字架という杯を自分は飲みほさねばならないんですか。

私は今まであなたの言いつけに背そむいたことはありません。父の御意みこころは即ち私の意こころ。あ

なたのご意志が私の意志。私は全部、あなたと一つになって歩んできました。そして、

人々に尽くしてきました。その私があなたに捨てられて、地獄に突き落とされて、あ

なたの懷ふところから引き裂かれる。これだけは勘弁していただきたい」

というのがキリストの「子」としての叫びです。「僕しもべ」としては従う。しかし、子として、親

子の父と子という愛を引き裂かれるのはたまりません。今まで離れたことがないんですから。「けれども、私の思いではなく、あなたの御意をなさってください」と言う。

「そしてその汗が血のしたたりのように地に落ちた」

「天使たちが現れて、キリストを力強^づけた」

と書いてある(ルカ22・43〜44)。それくらい、あそこで苦しめられた。でも、そこから決然と立ち上がって、十字架にかかられた。

「彼らを赦してやってください」

という、そういう死に至るまでのキリストの姿というのは凄いです。

無私、私無き世界。それから、人に対しては愛そのもの。神さまに対しては、祈り。祈りでもいつも父と一つになっている。こういうキリストです。そのキリストさまが十字架で実は、

「辰雄よ。お前の捨てられないお前の自我は、そんなものは全部私がそこで全部片づけているんだ。お前はきれいなになっている。無にされている。自分で無になるんじゃない。無を無条件であげるよ」

と。無というのは真空です。真空の中に何かが入ってくる。我々は内側がゴタゴタしているから、入って来ようがない。どんなに美しい御馳走も、お腹^{なか}がいっぱいだったら、入ってこれません。お腹が空腹なときに、どんな素朴なお料理でもおいしいし、喉が渴ききついているときは、ま清水はおいしい。空っぽなところに本ものが入ってくる。

「十字架というものでお前さんはきれいに片づいているんだから、もう罪の問題も、良心の問題も、心の問題も悩まないでいい。そのまんまでいい。あるがまんまでいい。

汚いなら汚いままでもいい。そのまま救ってあげる。それが十字架だ」

ということに気づかれた。だから、

「幸いだよ、霊の貧しき者は。私の十字架で既に霊が貧しくされている。だから、私」というこの天国をお前にやるよ」

という。これは霊なるキリストです。霊界に行かれた霊なるキリストがおりてくる。

お釈迦さんの世界でもそうでしょ。無条件に救い給うというのが親鸞さんでした。弥陀の本願には老小男女を選び給わない。善人悪人の区別をなさらない。すべての人を救い上げるというのが仏のご本願です。まだ善人の方は自分の善により頼んで、それだけマイナスがある。悪人はもうより頼むものがなくて、地獄しかないと思っっているから、本当に本願の救いがあるたい。それにすぎる。その心だということを親鸞は仰った。

それはキリストにおいては無条件なんです。すべての人を無条件で受け入れる。それが本当のキリストの意^{こころ}です。残念ながら、日本のキリスト教界はそこまで徹底しているだろうか。私も初期の頃は、そういう教会に通いましたが、小池先生に出会ってからは離れましたので、それ以後のことは何とも申し上げる資格はないけれども。私はやはりそこまで徹底して仰っていたいて初めて、私のような凡夫は救われるんです。毎日、毎日、自分を吟味して、「今日はどうだった?」「はい、今日は○です」「次はどうだった?」「今日は×です」なんて。3打数1安打だったら、これは困りますね。5打数5安打であろうが、何であろうが、そんなことは関係ない。やはり、お前はお前の道を行けと。イチロー選手(鈴木一郎、プロ野球選手)はそう

いう方ですね。あの方はその日の調子に一喜一憂していない。自分の理想に向かってひたむきに進んでいきましょう。私どもにひきなおすと、

「お前はあるがままでいい。お前のことは、もうこだわらる必要はない。私が全部引き受けた。その代わり無心の境地でひたむきに、なすべことをせよ」

と、そういうふうに響いてくる。

●敬天愛人

次に教育者としての先生というところへ移りますと、先生は10年間、獨協中学・高校の校長をなさって、そのときに教育の理念として三つの柱を立てられた。それは何かと言いますと、まずは、「敬天愛人^{けいてんあいじん}」。西郷南洲の言葉です。

天を敬い人を愛する。これが大事なことです。人間は己が宇宙の主人公になったらだめだ。人間を超えた偉大なる実在者——神さま、仏さま——その前にこうべを垂れる。天を敬う。これが人間の魂の姿として大切だということです。これが根底だと。さきほども、宗教心がなければ本当の文化は育たないということを申し上げました。教育においてもそうだということ。

まず親が、先生が、育てる立場にある者が敬天愛人を実践して初めて、本当の子どもが育っていく。みんな子どもというのは大人を見て育つものです。大人がだめなら、子どもに立派になれと言ったって、これは無理な話ですね、心の姿としまして。能力のあるなしの問題ではない。人間としてです。

人間として、人間はみんな神の子、仏の子なんですから。人間はみんなそれぞれ才能は違います。しかし、人間としてはみんな尊い存在です。その尊い存在は天を敬う、あるいは天からその存在を賜っている。天から自分の生命を賜っている。そういう人間存在の尊さ。人間存在というのはそこにある。神さまの御示しでこの世に生まれてきた。そういう我々の人間存在を粗末にあつかってはいけない。その代わり、その人間存在は、自分たちをこの世に生かしくめてくれている天なる神さま、仏さま、そういう神仏に対して畏敬の念、敬う心——信者であれば信ずる心になります——それを持つ。そこでつながりを持たないといけない。本当の心のつながり、それを持たなければいけない。それがあつて、今度は横に向かつては人を愛する。これが生まれてくる。

もともと、「宗教」「レリジョン」という言葉は、ラテン語で「レリギオ」という語からきている。「レ」とは「再び」という意味で、「リギオ」というのは「リガーレ」「結ぶ」という言葉から来ている。何に結ぶかという、神さまと結ぶ。自分たち人間存在というものと神さまとを結ぶ。人間というのは本来、結ばれていた存在なんです。それがいつしか忘れてしまった。もう一度、幼き日の追憶に帰りなさいと。生まれる以前の結ばれていた、そういう追憶の世界に帰りなさいという、「再び結び返す」というのが「宗教」の本当の意味なんです。結び返します。

それから、先生はこんなことも言われました。「大言海」という辞書で、「ひと」という語を引いたら語源として、「霊止^{ひと}」、「霊が止まる」と書いてあります。「ひと」の語源は「霊が止まる」ということから来ている。つまり、人間存在というのは神霊、神の霊が止まる、そういう存在だという。神霊を宿すもの、神霊が止まっている存在、これが「ひと」の起源なんです。だから、それが止まっていなければ、「ひと」でない。どこかへぬけてしまったら、もう一度結び返して止まってもらわないといけないわけです。

そういうことで、この「宗教」というさつきの「レリギオ」という言葉と、「ひと」の語源である「靈^{ひと}止」、これまた不思議につながっていることになります。

先生は非常に漢字というものを大事にされました。さつきの「無」という字もそうですし、その他いろんな漢字の語源とかを調べて、「素晴らしい、素晴らしい」といつも言っておられました。これもその一つですね。「靈が止まる」これを「ひと」という。

●天賦天職

それから二番目は、「天賦^{てんぷてんしよく}天職」。この「天賦天職」ということがまた極めて大事です。特に日本においては。と言いますのは、さつき申しましたように、人間存在はみんな平等なんです。障害で生まれた子も、どの子もみんな人間存在として尊い存在です。薬物で障害をきたしたお子さんは気の毒ですけれども、しかし、この世で生をうけている以上は、すべてが非常に尊い存在です。それから、五体不満足な方だつてそうですね。みんな尊い存在なんです。

ところが、それぞれ人間というのは、持ち味が違います。才能がちがいます。スポーツの素晴らしい子、数学がもの凄くできる子、音楽が凄く素晴らしい子、絵を書かせたら凄い子。いろんなのがいるわけです。これは全部、天から授かっている天賦、天から授かったこれまた才能である。神さまは人間を画一的につくらない。

ちょうど、ここにあります素晴らしい花がそれぞれの花も素晴らしい。バラもスミレも素晴らしいし、それぞれが素晴らしい。それが大調和をなしているのが、自然界の素晴らしいです。そのように人間も、それぞれの人がそれぞれ隠れた素晴らしい才能をたまわっている。それを本当に目覚めさせて、引き上げて伸ばして、花咲かせるのが教育です。そういう教育でなければいけない。

ところが、一律に試験で五教科七科目とか、とにかくおしなべて画一的に——最低限なものが必要でしょうけれども——画一的にそういうテストで能力を測って、それで人間の序列が決まる。これは全く、人間というものを一つの型に押し込んで殺す道なんです。なぜ、型にはめるかというと、出世したいから。出世するには、いい官庁に入り、いい企業に入り、なんとかかと、みな「いい、いい、いい」というのが全部付きます。

「お父ちゃんは出来がわるかったから苦労した。お前には学校にやりたい」

なんて言つて、無理やりに学校にやらす。善意であつても、子どもには迷惑至極です。やはり、子どもの持つている本当の才能を生かしてやる。そのためには親が犠牲になつてもいいんだよという親ならば、子どもは素晴らしい育つと思う。

そこで第二番目に、「敬天愛人」の次に「天賦天職」と言われた。人間はそれぞれ、天から授かった才能がある。その自覚ができたときに、今度はそれを生涯貫きなさい。金が儲かるからこの仕事をするとか、この仕事は金が儲からんからやらんとか。そうじゃなくて、今は儲からなくても、自分はこれが天賦だから、それを天職と自覚してそれに突き進む。そういう気魄、心構え、これが大事だということを諄々^{じゅん}と説かれた。

どれだけ父兄がそれに賛同したかわかりません。「受験、受験」の時代でしたからね。

「ああ、また小池校長は理想的なことを言っているわ。校長は頭がいいから、勝手なことと言えるけれども、うちの子は……」

なんて思っていたかもしれない。けれども、今はまさにそうでしょ。オリンピックが華やかで

したけれども、オリンピックで活躍した選手なんていうのは、やはりあれでよかったんじゃないでしょうか。勉強させて学者になれるかといったら、それはなれたかも知れませんよ。けれども、好きな道に行かせてやる。「好きこそものの上手なれ」と言いますものね。その代わり、「自己責任だよ。やるのはお前だ。経済的な面では面倒みてあげるけれども、成功するかせんかはお前の努力次第だよ」

と。こういうかたちで励ましてやる。また、そういう子はまたいい指導者に恵まれたり、いい先生についたりして、何か道が開けていく。さっきの、

“Where there is a will, there is a way.”

「精神一到何事か成らざるん」

「天は自ら助くる者を助く」

という諺もあります。だからやはり、ひたむきにやる人には、何かしらそれを助けようという、天の何か作用が働くのではないかと思う。私は何もクリスチャンだけではないと思う。とにかく、ひたむきに一つのものに突き進んでいる人を天は放っておきはしない。

●光の世界へ

私は、我々はこうやって地上に生きていますけれども、この世を去ったときには全部、天界に入るんだと思っています。仏教の方も、キリスト教の方も、どんな方も全部、天界に、靈界に往く。そこで自分の子どもたちとか、自分に縁のある者たちを守っていると思うんですよ。祈って助けていると思う。それで天使になって、

「がんばれよ、がんばれよ」

なんて言って、励まし役をさせられているんだと思う。向こうは結構忙しいと聞いてます(笑)。

というのは、悪い靈もいるものですから。闇の靈がいる。地獄へ暗闇へ引きずり下ろそうとする靈と、光の靈とが戦っているそうです、向こうの世界では。だから、変てこな靈にとりつかれたら、とりつかれた人の責任というよりも、とりついたり振り回されて不幸な結末を招くということのようです。私は靈界を見てきたわけではないけれども、いろんな本を読んだり、いろんな方のお話を聞いたりすると、どうもそうらしい。丹波哲郎なんていうのは、『大霊界』なんていう本を書いています。丹波哲郎さんという俳優さんも素晴らしいけれども、なにも丹波哲郎さんによらずとも、本当に向こうの世界は厳然としてあります。

日本人は、お彼岸になれば、ご先祖を大事にする。お盆になれば、京都だって、送り火をたぐとか、いろいろそういう行事をしますのは、あれは決して根拠なくやっているのではなくて、長い年月の間にそういうものが築かれてきて、それなりにそれぞれの意味があると、私は思っている。だから、それを私は大事にしたいと思っています。

「クリスチャンだから、あなたも、こうやって死になさい」

と言われたら、

「私はキリスト様がいらつしやるから、キリスト様が私を助けてくださるから、それでいいんですよ。むしろ、私はご先祖をキリスト様によってお守りくださいとお祈りしている。もちろん、そういう仏さまも助けてくださればありがたいお話です」

と言う。向こうの世界では全然、喧嘩なんかするはずがありませんよ。

大体、自我のある人間は向こうへ行けない。自我のある人間は長いこと修養せんならんそう

ですよ、向こうで途中の世界でね。先輩方に助けられて、それでだんだん、光の世界に入っていくそんなんです。つまり、自我のある人というのは非常に暗い。我々は暗闇からお陽さまのところに行く、目がクラクラとしますね。目がだんだん開かれていって、やつとものを見ることが出来る。でも、太陽は見られませんか。だから、太陽はガラスをススで黒く焼いて、それで太陽を、日食とか月食とか見たでしょ。

そのように、本当にこちらが光そのものでないと、光そのものと対することができないそうです。だから、向こうの世界に行きますと、始めはかすかな光です。それでも、光にそこが来て来た人はすつと行く。闇が好きなのは闇の方へ行く。自分で選ぶそうなんです、人間はどこまでも。この地上で闇の世界ばかりしか知らない人は、光の世界が嫌なんです。「闇の親分たちがお迎えに参りました」と言うと、「よおー、よく来てくれた」と、そつちへ行くそうです。ところが、光の世界を憧れる人は、地上では「キリスト」の「キ」の字も知らなくても、光の子たちが来ると、

「これぞ、私が求めていた世界でした。あなたはどなたですか」と言う。それで向こうの世界へ行く。そういうまことに向こうの世界というのは、不思議でありながら、合理的な世界です。つまりまったく不平等がない。この世で金儲けばかりやっていた人は、その世界になかなかすつと入れなくて、しばらくそこで修養するそうです。だんだん心が清くされていくと、だんだんと高いところへ上っていくということです。だから、

「心の清き者は幸いなり、その人は神を見る」

と、ちゃんと書かれています。それはキリストの告白なんですからね。

さつきの天賦天職の話に戻りますけれども、そのように、ひきたむきにやっている者を天は助けていく。親もそのことを信じて、本当に天の心で子どもさんを育てる。

「お前のとりえは何や？」

「いや、わからんや」

「じゃ、わかるように一緒にさがそうね」

「そんなことをしたら、もう年齢的に間に合いません」

「間に合わなくなつていいよ。人生は長いんだ」

と。だいたい、

「15歳になつたらこれをせんならん、20歳になつたらこうせんならん」

なんて、それがいかん。やはり、遅咲きのバラもあれば、早咲きの桜もあるんですから。その子その子の成長の度合に即して、そして花開くように、社会もそういうあつたかい目で見ないといけないと思う。それを、「天賦天職」という言葉で、教育理念としてみごとに表しています。

●自律自彊

それから三つ目。「自律自彊^{じりつじきよう}」といいまして、自分で自分を律する。それから自分を鍛える。事を成さんとする者は、志を立てたら必ず自分を鍛えぬいていかないとだめなんです。安易な道なんかどこにもありません。「学問に王道なし」と申しますように、どの道もそうです。

スポーツの選手たちだって、本当に大変な努力をしています。しかし、その努力が苦痛ではないようです。目標があるから。楽しみがある。努力する、自分で自分を鍛えること自体の中に喜びを見いだしていく。甲子園の野球の高校生も同じでしょうね。そういった、自分がどろん

こになりながら、くたくたになりながら、それでもなお私はこれをやらざるを得ないという、そういうものと結びつくときに、その子は成長していくんです。

ですから、敬天愛人を基本とし、天賦天職の自覚をもつて、そして、目標に向かってまっしぐらに進むという、そのためには自分で自分を律する、生活を正しくする。遅刻なんかしないとか、そういうようなかたちで自分を鍛えるということが大事なんです。自分で律し、そして自分を鍛えていく。これが獨協中学・高校の教育理念だという。素晴らしい理念だと思います。まあ、それにひきかえ、現代の社会というのは、テレビゲームがありますし、自分の部屋にこもってゲームやったりとか、テレビを見て夜遅くなったりとか。いろいろそういうことで、非常に教育環境は、文化的文明が進むにつれて、ある意味では、自分で自分を鍛えるという意味からは悪くなりますね。乗り物だつてすぐ自動車に乗ったりとか——私は自転車通勤しますけれども——やはり、身体をある程度、若い時に鍛えないといけない。

農業の方は麦踏みということをやりますね。私の子どもの頃は、自分の周りが畑だったんで、霜が降りるような所は麦を踏んで、それをみんなつきあつて、そして、麦が実るという。麦踏みのはころは、空にはヒバリが囀^{さえず}っていました。私はマラソンをやつてまして、夜明けにこそつりと自分でそういう所を走っていたんですよ。明るい所を走るのが恥ずかしいからね。ああ、素晴らしいなあ、春は素晴らしいなあ。ヒバリがさえざり、向こうから太陽が昇ってくる。麦畑には霜が降りていて、麦踏みをしている。素晴らしいなあと思ったことがあります。

●専門はゲーテ

これが先生の教育理念ということでありました。それから、学者としての小池辰雄ということになります。これはごく簡単にいたしますけれども、先生はいうまでもなくドイツ文学の権威者です。本当に好きなんです、大体、本が好きです。さつきも申しましたように、すべてが本に変わってしまうほど本が好きです。それから、すごく丹念ですね。コツコツコツコツと一つのことをなさる。ある時は、2年くらい、「ベルジャーエフ、ベルジャーエフ」でしたよ。とにかく打ち込む方でしたね。

(註：ニコライ・ベルジャーエフ、1874～1948 ウクライナ生まれのロシアの哲学者。小池は1960年に「神と人間の実存的弁証法」(ベルジャーエフ著作集第六巻、白水社)を邦訳した)

専門はドイツ文学、ゲーテです。ゲーテが好きなんです。小池先生のキリスト教の恩師である藤井武先生という方は非常に潔癖な方で、

「ゲーテには警戒しろ」

「なぜですか」

「たくさん恋人おつたから」

というわけです。ゲーテにとつては、魂の遍歴の過程においてたくさんの女性が五、六人は現れてますね。だから、

「あんなのはキリスト教の観点からしてよくないから、ゲーテには近づくな」
と仰つたらしいけれども、先生はゲーテに打ち込んだ。

それはどういう点かと言いますと、ゲーテという方は当時のキリスト教界の中にはまらなかつた。当時のキリスト教という狭い枠を突き抜けた、本当に自然の子だった。ゲーテは何を愛したかという、まず神さまです。ゲーテは神さまの前に無条件に——「神さま」といつても、それは神さまを現している「キリスト」です——

「このキリストという方の前には私は無条件に頭を下げる」

と、ちゃんと晩年に告白しているんです。キリストにおいて神の光が現れていると。

ゲーテは「光の子」と言われる。ちょうど太陽が中天にさしかかった12時頃に、オギヤーと生まれたと言われている。光の子だと。神さまの光がキリストにおいて輝いている。だから、キリストの前に頭を垂れる（うなづか）と言う。

それから、大自然です。大自然は神さまの創（つく）られたものである。大自然の中で最も素晴らしきものは太陽だ。太陽こそは自然の光です。太陽がなかったら、これは真っ暗です。ゲーテは太陽を凄く愛した。

それからもうひとつ。人間世界における自然はというと、女性なんです。女性においてその自然の光が現れているという。女性を性の対象としてとか、そんな見方ではない。女性というものの中に神秘なるものを見た。女性ご自身はどういうふうに分（わ）かっているか？ 知らないけれども、男性の目から見ると話ですけれども、女性というものの非常に神秘なるものを見た。それで幾人かの女性に出会うと——その幾人かの女性はそれぞれに個性がちがう——出会う女性、出会う女性によってゲーテの魂は非常に変化し、進化していくそうです。私はその後の女性の運命が気になってしょうがないけれども。しかし、それはそれぞれが独立の人格だから、それでいいのでしょうか、ということにしておきたい。とにかく、女性における神秘なるものが自分を変革していく。だから、ゲーテの『ファウスト』という凄く詩があるんですが、その最後が、

「永遠に女性的なるものが

我らを引きて行かしむ」

という句がある。それで、小池先生はそのあとへ、更にソネットを二行付け加えた。

「愛と喜びをもつて

聖なる太陽へ」

と。「聖なる太陽」とは即ちキリストです。先生は、「天界でゲーテはきつと喜んでいるだろう」と言う。そういう方なんです。

●太陽はキリストの愛の血

ですから、先生がゲーテに打ち込んだというのは、ゲーテのハートに共鳴したんです。ゲーテと自分が一つみたいな気持ちで、ゲーテの心を心とする。それを論文で表している。だから、ああいう論文というのはいですね、日本の学者の中には。

たしかに、日本の学者の論文は、「ドイツのゲーテ研究の第一人者の誰それは、これについてはいこう語っている。これについてはこう語っている。故にこうである。しかし私はこう思う」とか、なにかそういう比較的な評論みたいなのが大体、文学というゲーテ研究というもののようだと私は思う。だが、先生はそんなのはおかまいなしで、自分がゲーテになりきって、ゲーテの心を心とする。それには、ゲーテは深く聖書を読んでいたら。聖書を深く読んで、ゲーテの心にならないとゲーテはわからないと仰る。

ところが、日本のゲーテ研究家は聖書を読まない。西洋文学をやる人で聖書をあまり読まないでやる人が多い。それはまあ、勝手ですけど。先生は果たしてゲーテの学者たちからどう評価されたかは知りませんが、私のような素人からみたら、これは本ものだなという

ふうに思います。

今、太陽のお話をしましたけれども、また、先生は太陽が好きなんです。だから、祝日や祭日にはたえず日の丸の旗を掲げました。

「これは太陽を表しているんだ。太陽はキリストの血である。キリストの血で我々は真つ白にしてもらった。それもこれも全部きれいにしてもらった。太陽はキリストの愛の血。それが太陽だ。そして、それで真つ白にされた白地。これはキリスト信者の角度からみたら素晴らしいものだ」

と言って、旗を掲げておられた。そういう心を受けとらなければ、「なんだあれは右翼ではないか」なんて誤解されたりすることがありますけれども。そういう太陽に対する非常な憧れ、憧憬がありました。それから、こういうことも仰っていました。

「地球というものは太陽の存在なくしてあり得ない。地球というものは太陽の引力によつて引張り回されて、太陽の回りをグルグル回っている。もしも、太陽がなかったならば、地球というものは存在しない。太陽から熱をいただく。光をいただく」

と。自然の作物もすべては太陽の恵みで育っていくわけです。だから、冷夏となりますと、作物が育たない。オゾン層が破壊されますと、紫外線によつて我々の皮膚がやられたりします。もとはそうではなかった。本当に太陽というのは恵みそのものであつて、地球をしてあらしめている。地球という存在そのものが太陽でもつて成り立っている。しかも、太陽は地球に対して何も求めない。与える一方です。

だから、私の子どもの頃にもよく太陽に向かって拝んでいるご年輩の方がいましたが、私はそれは素晴らしいことだと思う。

「太陽さま、ありがとう。あなたのお陰で我々はこうやつて生きています」

という、その敬虔なる思いを忘れたら、「太陽は化学的な物質か」なんて、そんなことだったら、これは大変ですよ。

そういうことで、太陽というものの素晴らしさ。そして、それがまた、先生においては神さまにまたつながるんです。神さまというのはそういう方だと言う。

●在りて在らしめる者

旧約聖書の中にモーセというイスラエルの偉大な指導者がいました。そのモーセに神さまが呼びかけた。モーセはそのときはミデアンの田舎で羊飼いをしながら、幸せな結婚生活を送っていた。80歳のモーセに神さまは現れた。

「モーセ、モーセよ」

「はい。あなたはどなたですか」

と。かくかくしかじかのものと。

「お前は、イスラエルの民を、エジプトで苦しんでいる民を救い出せ」
と。「十戒」の映画にありますようなあの場面ですね。

「いえいえ、もう私は年とつているし、第一、イスラエルで私は受け入れられなかったから、ここへ亡命して来たんです」

「いやいや、お前をつかわす」

「ところで、あなたのお名前は何と言われるのでしょうか。何と説明したらいいのでしょうか」

と言ったら、

「我は有りて在るものなり」

と神さまは言われた。「我は在るもの」だけでなく、「有りて在るもの」と重ねて、「有りて在るもの」と言う。私はそれを、本当の实在者と——我々は有つても消えていく。神さまは有りて在り続ける——ただ「有りて在るもの」と、私はこう思った。我々はただ有るだけのものでまた消えるもの。しかし、神さまは有りて在り続けるものと思った。

ところが、小池先生は太陽を見ていた時ハタと気がついた、

「有りて在らしめる者」

と。「在る」という存在が他者を在らしめる。他者を生命づける。これが神さまだと。神さまの本質というのは、自分が永遠の实在者として存在して、「ああいい気分だ」と言っているようなものではない。他の生きとし生けるものすべてに生命を与え、それを生かす。在る者が即、他者を在らしめる。これが神さまの本当の姿であるということに気づいた。文法的にもヘブライ語ではそれが可能だそうです。普通の学者はその説をとりませんけれども、小池先生は、「自分は、そのヘブライ語の『我は有りて在るもの』というのを、『我は有らしめて在るもの』あるいは『我は有りて在らしめるもの』と、そういうふうに読み取りたい」ということを宣言された。

そういう読み方というのは、私は素晴らしいと思う。ものごとを一つ一つ見てなくても、それを常に一番深い根源の世界、神さまの世界とのつながりの中でのものを見る。そういう見方です。これは、宇宙的な把握でなければ、それは出てこないと思います。自分が何かに囚われていたら出てこないと思う。

明日のことを思い煩ったり、仕事のことを思い煩ったり、家族のことを思い煩って、絶えず何かの思い煩いの中に——私はかつてそこにいたから、キリストに救いを求めたけれども——何かに絶えず気にかかって囚われて、下を見たり横をみたりやってますと、そういう世界が開けない。いつも魂がこの地上を突き抜けて、天の世界にあつて、それからこの地上のことを見えますときに初めて心にゆとりが、潤いが、すべてを包もうという、そういう豊かさが現れてくる。人に対して優しくなれる。心配している人を励ますことができる。そういう存在になる。先生というのはそういう存在でした。

●『無の神学』

それからもう一つ、学者としての先生はやはり、キリスト教学の方でも独自の神学を開かれた。ルター研究者の佐藤繁彦という先生の『ローマ書に現れたるルターの根本思想』という——これは京都大学で哲学の学位をとられた学位論文です——それを読んで大変感動されました。高校時代にその先生の講演を聞かれたそうです。数年後にその著作を見て、とても感動して、それから、神学という——神さまに関する学問——それに目覚めて、コツコツとその道をわけいってこられました。そして、小池辰雄著作集の第三巻『無の神学』（1982年刊）という本を出されました。ちなみに、第一巻は『無者キリスト』（1975年刊）と言いまして、これは初めは著作集の第一巻として出されましたが、装丁を新たにして、河出書房新社から出さ

れたものです(2001年刊)。これも本当に素晴らしい本です。そこにももう既に神学に関する若干の論文が収められているけれども、本格的には第三巻の『無の神学』というところに小池神学が告白されています。先生はそういった、神学者としても独自の地歩を築かれたと思います。

●『靈界の星々』

それから、詩人としての小池辰雄。これも、先生は「自分は詩人だ」と仰る。

「自分は伝道者であり、学者であるよりも、実は本質は詩人なんだ」

と仰る。ゲーテの『ファウスト』というのは詩なんです。凄い詩です。だから、先生は『ファウスト』に匹敵するような詩をつくりたかったらしい。文学の世界ではなくて、キリストの世界で。それを晩年の自分の悲願としておられました。百歳くらいまでかかってそれを仕上げたという、そういう思いをたえずもらしておられたけれども、未完成で終わりました。先生の短歌とか詩とかは、著作集第八巻の『詩歌集』(1986年刊)という一冊の本に収められています。

そのように非常に詩を愛し、自分でも詩をつくり、自分でも讃美歌を書いたりなさっていますが、ここに持ってきましたのは、『靈界の星々』(1998年刊)という本です。これは先生が亡くなられたあとから、先生から預かっている遺稿をもとにして出版された。まだ充分推敲もされてないような段階のものも、中にはあるんですけれども。それが全部、詩のかたちで、自分の生い立ちから、いろんな人物の伝記のようなものが全部、詩のかたちで告白されているものがこの『靈界の星々』です。

これはおもしろいですよ。どういう人物が詩のかたちで描かれているかといいますと、第一篇は「生い立ち」という自分のことです。第二篇は、幕末維新の烈士。佐久間象山、吉田松陰、西郷隆盛、勝海舟、坂本龍馬、この五人が取り上げられています。

それから第三篇は教育者。このトップに上がっているのは、新島襄。私は新島襄のこの詩をつい最近読んだんです、この講演のために。感動しました。私は最高裁を終わってから、同志社大学に勤めた。これも何か天の導きだなと思いました。新島襄がいかに烈々たる思いで同志社を立ち上げたか。脱藩して、国禁を犯してアメリカへ渡って、そこでいろいろ勉強した。当時向こうには本当に素晴らしいピューリタンの愛に溢れた人たちがいて、そういう方々——先生とか、宿を貸してくれた家庭の方とか——そういうご恩のおかげで非常に素晴らしいアメリカ滞在生活を8年くらい送る。そして、最後のお別れの演説をする。

「自分は日本に帰ったら、そういった教育をしたい。学校を建てたい」

と。そうしたらもう、たちまち寄付金が集まったそうなんです。そういうお話も出てきます。それで京都へ帰って、同志社を建てるんですけども、京都は仏教の大本でしよ。仏教の牙城がじょうへキリスト教で乗り込んでいくんだから、これまた大変なんです。それはもう暗殺されてもいくらいのことをやってのけたわけです。そういう捨身の精神すてみで立ち上げられたのが同志社大学だということを思いますと、私が同志社に行ったということは何かこれは不思議なことだと思います、余談ですけども。

それから次に、天野貞祐。そして、佐々木吉三郎。これは小池先生の小学校のときの校長先生です。小学校5、6年生のときに、この校長先生の修身のお話が——今でいう道德です——

素晴らしかったそうです。そこで、その佐々木吉三郎先生が亡くなられてから、もう小池先生が90近い歳になっていましたが、小学校へ訪ねていかれた。

「実は、佐々木吉三郎先生のことを未だに忘れられないので、その先生が書き残されたものがないですか」

と。図書室に案内された。残っていたものがあつた。それを読んでまた感動した。

ちょうど小池先生の一歳年上と一歳年下にその校長先生の令嬢姉妹の女子生徒があつた。その一年後輩の令嬢が生存しているというので、その方に連絡をとって、かくかくしかじかということで、再会を喜んだという。そんな話を聞いております。そういう佐々木吉三郎の話があります。昔は、小学校の先生、校長先生の中に素晴らしい人がいた。やはり、子どもの頃は感受性が強いですから、いい先生に巡り合うと、もの凄くいい影響を受けますし、ひどい先生だと、本当に心が傷つきます。だからやはり、一番大事なのは幼稚園、小学校、その先生方です。そこで魂の教育が出来てしまいます。それからあとでは、いくらそれを直そうと思つても、もう大学にきてからなんて、なかなか大変なんです。

第四篇、芸術家では詩人として、ダンテがあがつている。『神曲』を書いたダンテです。先生はダンテとゲーテが大好きです。

第五篇に宗教家。第一章は仏教の方で、最澄、空海、法然、親鸞、榮西、道元、日蓮、一遍、一休、良寛それから白隠。こういう方々のことをずっと詩のかたちで歌われています。非常な敬愛の心をもつて書かれています。

キリスト教にいきますと、アッシジのフランチェスコ、聖書のルター、内村鑑三、藤井武、賀川豊彦。こういう人物が出てきます。

それからちよつとばして、芸能人では、チャップリンが出てくる。チャップリン、マリリン・モンロー、松井須磨子、中山晋平、美空ひばり。こういう芸能人が出てきます。先生が人を見る目というのはちよつと普通の人とは違う角度から、道徳的な方とは違う角度から、それぞれの人の本質、天賦なるもの、それをいかに生かしているか。いかに自分を投げ出して、一つの道に打ち込んでいるかを見る。チャップリンなんかそうですものね。

●そっくりそのまま受け入れる

素晴らしいものを素晴らしいと素直に讃美できる。これがまた大事なことです。キリスト教を信仰したら、とかくキリスト教以外のものについてはケチをつけたりとか、狭量なことが多い。それが日本における本当のキリスト教の善きものを拡げていく上で、どれだけの大きな壁になっているかということをおしはしめじみと感じます。もつともつと広やかであつてほしい。

それはどの宗教でも言えます。およそ「宗教」という枠を超えて、本当のものをお互いに尊ぼう。それが我々を養ってくれ、この人間社会に平和をもたらすのだから。物質界、この地上のゴタゴタはどうしようもない世界からの救い。それを突き抜けたところからもう一度、地上を救いへと担い上げていこうじゃないかと。縁の下の力持ちになろうじゃないかという、これが本当の宗教だと思う。人間の力ではできない。だから、神仏という人間を超えた方のお力にすがろうと言う。また、神仏は、無私の心で尽くす人間は、助ける。だから、そういう人たちの出現を待っているはずなんです。

そういった全人格的な角度で、私は今日は、人間小池、あるいは教育者としての小池とか、

芸術家として、あるいは学者としての小池、宗教人としての小池というように、いろいろな角度を変えて申しましたけれども、本当に一つなんです。一つの人が多彩なかたちで現れているだけだと思います。人間というものは、「あの人はこんな人だ」と決めつけるのは、人間に対する冒瀆です。人間にはいろんな面がある。いろんな面をそのままそっくり受け入れる。それが大事なことではないかということを、先生との長いお付き合いを通して感じました。

●自由人

詩人としての小池から、最後は宗教人としての小池。それが私の本題なんですけれども、もう時間もありませんし、今までのお話の中にずいぶん出てますから、そんなにたくさん申し上げないでおこうと思います。

先生という方は本当の自由人でした。本当の自由というものは、自分というものから、囚われから、解放放たれるところに成り立つものだという。

「本当に自分から、囚われから解放放たれる自由。束縛からの自由。これは外的な束縛だけではない。自分自身という束縛からも解放放たれる。自己が完全に解放放たれている。大空に羽ばたかされる。そのときに初めて今度は、人への愛、愛への自由として展開する。自分のことで汲々^{きゅう}としているあいだは、とても『人を愛せよ』なんて言われたつてできない。本当に自分が解決されて初めて、安心して人に優しく接し、人を助け上げることができる。束縛からの自由、解放というのはまだ消極的な面で、本当の自由は人へ、愛への自由という行動面に現れてこなければいけない」

と。そういうことを仰っておりました。それから、

「祈りというものはお願いごとではないんだよ」

と言われた。先生にとつてはキリスト、キリストという霊的人格、それも活ける実在、その霊的人格に自分を投げ入れ預け入れる。そこで一つにさせていただく。あちらがこちらを包んで、

「お前と私は一つだ。私はお前と一つだ。大丈夫だよ」

と。向こうから自分に迫り、自分をそういう霊的な存在へとたえず新たに変わってくださる。

「これは絶対無条件の恵みだ。人間の側に根拠があるのではない。神さまの愛——仏教でいえば仏さまの本願愛——その力が我々を支え、我々を正しい道へと導いて行ってくれる。それに対する帰依。だから、自分はナッシングだ。自分は何ものでもない」

と、そういう淡々たる境地で生きておられました。

そういうことが、私どもにとつては、非常な何か天からの大きな教えと申しますか、

「お前たちはこのように歩いていけば大丈夫だよ」

という励ましをたえず我々はいただいているような気がいたしております。

本日は、先生からいえば生誕百年でありますし、この小国町にとつては愛蔵書センター開設一周年という記念すべき時でございますが、こういうふうにして、その蔵書を受け入れていただいたその蔵書の本体であった小池辰雄はどんな人だったのかということを、私が先生に接した経験、先生の著作を通して学んだこと、そんなものの中から取り出して、お話し申し上げた次第です。では、これで終わりたいします。どうも、ご静聴ありがとうございます。(拍手)

●会場からの質問

武蔵野市との交流事業として、小池辰雄先生について大変わかりやすく聞かせていただきましたま

してありがとうございます。特に私が感動したのは、「南無キリスト」という一言で、小池先生の精神に触れたような気がしまして、大変に感動しているところでございます。

私が聞かせていただきたいのは、先生のお話とはまったく関係のないことで恐縮なんでしょうが、キリスト教の教典にバイブルがあります。世界中の言葉に訳されて読まれている。そして実質的な、古今東西を通じて、世界一のベストセラーだと聞いておるわけです。文学的にも著名な人がそれこそ何百年にもわたって世界に出てきましたけれども、その中で、宗教書のバイブルは量的にも世界一のベストセラーとおそらく変わらんだろうと言われていることを聞いたことがあります。それは一体、本当なんでしょうか。あるいは、先生のお立場からみて、それをどのようにコメントされますか。それをちよつとお聞かせ願いたいと思います。

(奥田) 諸外国でどうかということは、私は存じあげませんが。キリスト教国だったら、聖書はベストセラーになっても当然だと思う。それ以外の国でもベストセラーになるということはとても嬉しいことです。ただ、日本に関して申しますと、ベストセラーと言いながら、果たして本当にどこまで深く読まれているんだろうか。その点なんです、私が問題にしたいのは。売られているということと、本当に読み込むということは別です。特に小池先生は、

「聖書を身読せよ。身で読め。日蓮は法華経を身で読めと言った。日蓮においては法華経は体にしみついでいるから、龍ノ口で斬られそうになつたけれども、斬ろうと

した奴の腕がしびれて斬られなかつたという。そのくらい日蓮においては法華経というのは体にしみついでいた。我々が——特にキリスト教信者ですが——聖書を読むときに、決して上っ面で読むな。本当に聖書の奥深くまでわけいって読め。身で読め、身読せよ。聖書研究はたくさんされているけれども、身読している人は果たしてどれだけいるか」

と、しよつちゆう言っておられた。私は同感なんです。文学の好きな方も聖書を読んだり、「山上の垂訓」とか、いろいろキリストの言葉を読まれたりする。それはそれなりの役割はあるんだろうけれども、本当にキリストの心を心とする、そこまで読んでいただいているだろうか。私は、旧約聖書は、これはイスラエルが中心ですから、それについてまでは申しません。少なくとも、新約聖書という——非常に薄平い本です——新約聖書に関しては、もつともつと読んでほしいなと思う。読むについては、躓きが多いんですよ。さつき申しましたように、「教え」や「命令」として読んでしまう。

『汝の敵を愛せよ』？ そんなもんできません」

と、こうなんです。これは私は今日話せなかつたけれども、小池先生はこう仰つた。キリストの言葉で一番凄いのは、

「汝ら、天の父の全きごとく、全かれ」

という言葉です。つまり、普通の人は、いい人には善くする。憎む奴には、「この野郎！」とこうやる。でも、

「天の父は、善き者にも悪しき者にも太陽を昇らせ、直き者にも直からざる者にも雨を降らせたもう。そのようにお前たちも天の父の全きごとく全かれ。完全であられるごとく、完全であれ」

ということ、愛において完全であれという、そういう一つの命令です。それを、「できつこ

ありませんよ」と言うのが我々なんです。それを小池先生はどう言うかというと、

「私のところに来なさい。キリストに自分を預けなさい。そうしたら、私（キリスト）がそのように、愛せるようにしてあげる。力をあげるよ」

と。全部、そういうふうひっくり返して読む。そういう読み方をあまりキリスト教の人は教えてくれないと思う。だから、

『何々すべし、すべからず』ではない。そうなるよ、私がそうさしてあげるよ」

と。例えば、モーセの十誡で、

「汝、殺すべからず」

と書いてある。あれは、

「お前は殺人なんかしつこない。何となれば、私がお前の神ではないか」

と、ちゃんとレビ記には、

「我は主なり」

と書いてある。

「私がお前たちをエジプトから力ある手で引つ張りだして救い上げた主ではないか。

その私の民であるお前たちが殺人なんかしつこないよね、そうだろ？」

という、そういう愛の信頼の呼びかけの言葉だと。それを

「殺してはいけない、殺すな」

「盗むな」

という、「すべし、すべからず」だったら、反逆の心が出てくる。そうではなく、

「お前はそんなことはあり得ない。私の子ではないか」

と信頼している。さっきの「人を憎むな」というのも、憎むのは人間性として当然です。でも、

「人を憎めないような心に私がつくり変えてあげるから、私に依存しなさいよ」

という、すべてキリストが責任をもつてくださる。「何々せよ」と書いてあるのも、全部裏で、

「私のところに来れば、私がそうさせて上げるから、安心して私のところへいらつし

やい」

と読む。そうなれば躓かないんです。

例えば、日本で亀井勝一郎という著名な思想家がいました。あの方は若いときはキリスト教だったけれども、キリスト教ではもうやり切れなくなつて、親鸞の方へ行つた。私は、亀井勝一郎さんが小池先生に出会っていたら、親鸞の所へ行かなくても済んだのになと思つてゐる。多くの日本の文学者たちがみんな躓いて、そこから離れていくのは、「山上の垂訓」とか、そういった教訓として受けとつて、それをまともにやろうと思つたら、偽善者になるんですね。そこで嫌だからといって逃げて行つたのではなからうかというふうに推測します。

まあ、ご質問にお答えできたかどうかはわからないけれども、やはりベストセラーであるのは嬉しいけれども、もう一つ深い読み方をしてほしい。そのためには、『無者キリスト』なんかをぜひ読んでほしいと、そう思っているんです。

（『エン・キリスト』58号、2005年3月発行より掲載）